資料4

子どもの心の診療に携わる専門の医師の養成に関する検討会

卒前医学教育ならびに卒後の精神科専門医教育の現状

山内俊雄

1．　卒前医学教育における現状

卒前教育においては、精神医学の中で、基本的に一コマが、「児童精神医学」にあてられている。また、国家試験のガイドライン（ブループリント）には、「幼児・小児・青年期の精神・心身医学的疾患および成人の人格ならびに行動障害」の項で、知的障害、特異的発達障害、広汎性発達障害、行為障害、選択緘黙、不登校、非行があげられており、小項目には小児自閉症、Asperger 症候群、ADHD もあがっている。しかし、重み付は、全問題の１％とされている。この他に、摂食障害や神経症などの関連項目もある。

2．　卒後精神医学教育

各大学とも、クルズスのような形で、一応の勉強はする。後は、外来、入院などの患者を通して経験する。教室内に、児童・思春期・青年期などの診療・研究グループを持っているところもあるが、多くの大学で、マイナーな研究グループに属する。

精神保健指定医の申請書類には必ず１例は、「児童･思春期」に関連した症例の提出を求めている。

3．　日本精神神経学会と「児童精神医学」

学術集会では、シンポジウム、教育講演、ワークショップ、研修コースなどのいずれかで、ひとつは、「児童に関係したもの」が選ばれている。

4．　日本精神神経学会「精神科専門医制度」と「児童精神医学」

専門医になるために研修すべき内容として、児童思春期症例を経験することが挙げられている。そこでは、「患児および家族との面接」「「児童･思春期精神障害の診断と治療」「薬物療法」「精神療法」「心理社会的視点」「環境調整」などの項目があげられている。

以上のように､医師に向けての｢子どもの心の診療｣に関連する卒前教育は｢さわり｣だけの教育であり、卒後の、精神科医に対する教育は、「児童･思春期」が視野には入っているが、精神医学全体から見ると、力点はそれほど置かれておらず、「専門の医師｣とまでは行かないのが現状である。

このような現状を考えると、どのようにして｢専門の医師｣そ養成するかを新たに考える必要があろう。

埼玉県における取り組み

・平成３年（1991）に「埼玉児童思春期精神保健懇話会」発足
・埼玉県を４地区に分け、各地区で、年に4-5回の集まりを持ち、年に１回は、全県の会を開催し、シンポジウムや事例検討を開催
・これまでのテーマは「不登校」「児童思春期の諸問題」「子どもと暴力」「養育機能困難な家庭の子どもたちへの援助」「子どもたちの逸脱」「子どもと家族」「連携再考」「児童虐待」等々
・会合に合わせて、「地域情報コーナー」を設け、活動グループの紹介や情報の提供をする。
・参加者は、毎回130名から180名、教職員(養護教諭、教諭)、相談員（さわやか相談員等）医師、看護師、心理士、保健婦、ソーシャルワーカー、施設職員、司法、警察関係、
・参加者の感想として、連携・ネットワーク、情報の共有、相談できる場の理解、共通のテーマを違う視点で考える、一人で抱え込まない、

参考

・於母明子：児童思春期精神保健ネットワークの実際ー埼玉県児童思春期精神保健懇話会の活動ー．　病院・地域精神医学　44巻４号、475-480、2001
・MINDEX　平成３年

「子どもの心の診療に携わる医師の養成に関する検討委員会」資料

１．　学会名称:社団法人 日本精神神経学会

学会の活動内容概要：　精神医学と神経学の研究を進め，会員相互間の連絡提携を図り、もって学術文化の発展に寄与することを目的として活動を行っている。

２．学会の会員構成（小児科医、精神科医、コメディカル等のおおよその会員数又は割合）

平成１７年１月末日現在の会員数から、会員構成を割り出しました。

精神科医：約９７％（含む小児精神科医）」

小児科医：約０．０８％

他科、コメディカル等：約２．９２％

３．学会で対象とされている子どものこころの問題に関する領域･対象疾患

ICD―10 の F90～98 に限らず、小児期、思春期の統合失調症、感情障害、神経症性障害など、広く対象とする。これは、

日本精神神経学会が、精神科領域のコアとなる学会との認識であり、関連諸学会との連携を重視している。

4．学会の子どもの心の問題の診療に携わる医師の要請研修に関する取り組み

・学会総会でのシンポジウム、教育講演、研修について（別添資料）

・学会専門医制度のもとで、専門医になるための基本的研修項目として、児童・思春期精神障害を設定している。

5．今回のテーマに関連した資料

日本学術会議「精神医学研究連絡委員会ニューズ・レター」（第18期　第5号）にあるように本学会としても、「児童精神医学講座」の新設を要望してきたところである。

6．その他の意見

これまでの流れからすると、精神科と小児科がどのように連携をとることができるかが、ひとつの鍵のようにも思える。本学会としては、連携を推進する受け皿的役割を果たす必要があると、認識している。

第９６回～第１０１回日本精神神経学会総会で児童精神医学関係の講演等につきましては、下記の通りです。

○第９８回総会：

・会長講演「わが国の児童青年精神科医療の現状と課題」　演者：山崎晃資

○第９９回総会：

・教育講演「アスペルガー症候群をめぐって」　演者：杉山登志郎

・教育講演「成人になってからのうつ病の発症要因としての児童期成育環境」
演者：北村俊則

・シンポジウム：「児童・青年の精神医学－こどもの発達の視点と家族の役割－」
乳幼児期からの家族支援　演者：本城秀次
学齢期における行動障害をもつ子どもの家族支援　演者：山下　洋
思春期の摂食障害と家族　演者：西園マーハ文
青年期のうつ病と家族　演者：大井正己

・精神医学研修コース「ＡＤＨＤの診断と治療」　演者：市川宏伸

○第１００回総会：

・シンポジウム「児童青年期精神医療の諸問題」
児童青年期精神科入院医療における諸問題　演者：山田佐登留
大学病院から　現状と標榜科、要請過程の問題　演者：原田　謙
クリニックから 現状と民間医療機関における児童青年精神医療　演者：内山登紀夫
医療機関以外から　保健・福祉・教育・司法などでの児童青年精神医療
演者：亀岡智美
海外での経験から－外国での現状と日本精神神経学会の違い
演者：斉藤卓弥

・ランチョンセミナー：「アスペルガー症候群をめぐって」　演者：山崎晃資

・教育講演：
「注意欠陥/多動性障害（AD/HD）の診断・治療ガイドラインについて」
演者：齊藤万比古
「思春期の精神療法」　演者：西村良二

○第１０１回総会

・シンポジウム「児童精神医学に求められるもの　児童精神医学と関連領域」
演者：白瀧貞昭、竹内知夫、竹内研三、苗村光廣、村山隆志

・専門医を目指す人の特別講座「発達障害」　演者：市川宏伸

資料5

会の名称： 社団法人 日本小児科医会

会の目的：

本会は、小児医学の成果に立脚しつつ、小児の医療、保健および福祉の充実と向上を図り、もって小児の健全な発達と人格の形成に寄与することにより、国家･地域社会の発達の基礎の確立に貢献することを目的としています。

本会は、目的を達成するために、次に掲げる事業を行っています。

(1) 小児医療の調査･研究および小児医療の向上に関する事項
(2) 小児保健の推進と普及に関する事項
(3) 小児の福祉に関する事項
(4) 生涯研修に関する事項
(5) 医の倫理の確立、実践に関する事項
(6) 小児社会保険医療の充実と改善に関する事項
(7) 小児医療の国際交流に関する事項
(8) 小児医業の経営改善に関する事項
(9) その他、本会の目的を達成するために必要な事項

以上の事業を遂行するために、次に掲げる部を設置しています。

1. 総務部
2. 庶務部
3. 経理部
4. 法制部
5. 広報部
6. 公衆衛生部
7. 社会保険部
8. 学術部
9. 調査部
10. 医療経営部
11. 子どもの心対策部
12. 国際部

詳細は本会の URL を参照　　http://jpa.umin.jp/

会の会員構成： 小児科標榜の医師　6，4 0 1 名（平成 17 年 2 月末現在）

子どもの心研修会プログラム

第１回子どもの心研修会　東京　　日本教育会館一ツ橋ホール

前期：平成１１年６月２６，２７日　　後期：平成１１年７月１０，１１日

前期プログラム

３歳までの心（総論）	日本小児科医会	内藤　壽七郎
３歳までの心（各論）	日本小児保健協会	高橋　悦二郎
子どもの心の発達	東京国際大学	詫摩　武俊
親子関係の心理学	白百合女子大	森永　良子
乳幼児期の問題行動	文京女子大学	角尾　稔
学童期の問題行動	児童相談センター	甘楽　昌子
思春期の問題行動	慶応大学	渡辺　久子
社会性の発達	東京学芸大	辰見　敏夫
心理療法－カウンセリング入門－	筑波大学	台　利夫

後期プログラム

小児の精神疾患	文京大学	長畑　正道
小児の心身症	東京医科大学	星加　明徳
学校へ適応できない児への対応	東京慈恵医大	前川　喜平
心理療法	武蔵野日赤	今泉　岳雄
不登校児への対応	東大	衛藤　隆
心理療法－カウンセリング実際－	国士舘大学	井部　文哉
子どもの心の問題に対する診療現場での対応	日本小児科医会	井上　登生
育児相談における心の健康への配慮	日本小児科医会	南部　春生

第２回子どもの心研修会　　東京　　日本教育会館一ツ橋ホール

前期　平成１２年６月１０，１１日　　後期　平成１２年７月８，９日

前期

３歳までの心（総論）	日本小児科医会	内藤　壽七郎
３歳までの心（各論）	順天堂大	大塚　親哉
子どもの心の発達	お茶の水女子大	内田　伸子
社会性の発達	東京学芸大	辰見　敏夫
親子関係の心理学	お茶の水女子大	青木　紀久代
心理療法ーカウンセリング入門ー	筑波大	台　利夫
乳幼児期の問題行動	東京国際大	詫摩　武俊
学童期の問題行動	児童相談センター	甘楽　昌子
思春期の問題行動	慶応大学	渡辺　久子

後期

乳幼児期における心の健康への配慮	日本小児保健協会	前川　喜平
小児の精神疾患	梅ヶ丘病院	佐藤　泰三
小児の心身症	筑波大	宮本　信也
学習困難を示す児への対応	発達協会王子ｸﾘﾆｯｸ	石崎　朝世
心理療法	JP 東日本	村山　隆志
心理療法－ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ実際－	上智大学	黒沢　幸子
不登校児への対応	子ども心身医療研究所	冨田　和己
子どもの心の問題に対する診療現場での対応	日本小児科医会	石谷　暢男

第３回子どもの心研修会　　大阪　千里ライフサイエンスセンター

前期：平成１３年７月７，８日　　後期：平成１３年８月４，５日

前期プログラム

３歳までの心　　日本小児科医会　　内藤　壽七郎

子どもの心の発達 (1)乳幼児期　井上小児科　　井上　登生

(2)学童期から思春期

静岡大学　　杉山　登志郎

社会性の発達　　東京学芸大　　辰見　敏夫

乳幼児期の問題行動　　国立名古屋病院　　小崎　武

学童期の問題行動　　大阪人間科学大学　　原田　正文

思春期の問題行動

(1) 摂食障害　　神戸女学院大学　　生野　照子

(2) 非行・麻薬など反社会性行動　神戸市児童相談所　井出　浩

(3) いじめ　　京都市心身学習総合ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞﾙｰﾑ

土屋　守

後期プログラム

乳幼児期における心の健康への配慮

日本小児保健協会　　前川　喜平

小児の心身症　　筑波大　　宮本　信也

心理療法―ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ実際―　羽曳野病院　　岡田　正幸

小児の精神疾患(1)心的外傷後ストレス障害(PTSD)を中心に

阪神淡路大震災　　浅香山病院　　長尾　圭造

交通事故ほか　　武庫川女子大　　杉村　省吾

小児の精神疾患 (2)精神疾患　桃山学院大　　郭　麗月

被虐待児　　大阪府立母子センター　小林　美智子

現在の子どもをとりまく環境　子ども心身医療研　　冨田　和己

子どもの心の問題に対する診療現場での対応(PTSD の現場における対応含め)

甲南女子大　　稲垣　由子

第４回子どもの心研修会　　東京　日本都市センター

前期：平成１４年５月１８，１９日　　後期：平成１４年７月２０，２１日

前期プログラム

乳児から学童の心の発達	東京大	汐見　稔幸
思春期の心の発達（思春期問題の予防も含め）	慶応大学	渡辺　久子
社会性の発達	東京学芸大	辰見　敏夫
親子関係の心理学	文京学院大	柏木　恵子
乳幼児の問題行動	青山学院大	庄司　順一
学童の問題行動	国立精神神経センター	吉川　武彦
思春期の問題行動		
(1) 反社会性行動	千葉大学	羽間　京子
(2) いじめ	クリニックおぐら	小倉　清
発達障害	あいち小児保健センター	杉山　登志郎

後期プログラム

育児する母親への配慮	日本小児科医会	内海　裕美
小児の心身症	JR 東日本	村山　隆志
小児の精神疾患	東海大学	山崎　晃資
カウンセリングの実際	上智大学	黒沢　幸子
児童虐待（現場での対応）	虐待防止センター	坂井　聖二
ＰＴＳＤ（小児科医ができること、やるべきこと）	浅香山病院	長尾　圭造
子どもの心に対する診療現場での対応	井上小児科	井上　登生

第５回子どもの心研修会　　北海道　北海道大学学術交流会館

前期：平成１５年６月２８，２９日　　後期：平成１５年７月１９，２０日

前期プログラム

胎児・新生児の心の発達　聖マリアンナ医大　堀内

乳幼児期の心の発達　筑波大　宮本　信也

学童期・思春期の心の発達　慶応大　渡辺　久子

子どもの脳を科学する　北海道大　澤口　俊之

子どもの心身症とは　大阪医大　田中　英高

乳幼児の不適応行動（発達障害の早期発見と医療支援）

北海道小児科医会　氏家　武

学童期・思春期の不適応（摂食障害の臨床的特徴と治療的ｱﾌﾟﾛｰﾁ）

北海道大　傳田　健三

学童期・思春期の不適応（行為障害について－生教育・ADHD・LD）

国立精神神経センター　田中　康雄

後期プログラム

思春期の子どもを持つ親への配慮　札幌医大　熊本　悦明

ＰＴＳＤ（被害者への援助）　道都大学　小澤　康司

障害児との心のふれあい　旭川肢体不自由児Ｃ　長　和彦

慢性疾患の子どもの心理　関西医科大学　石崎　優子

ＤＶの実態と子どもへの影響　北海道虐待防止協会　内田　信也

学童期の子どもを持つ親への配慮（公教育に子どもの未来をたくせるか）

北海道教育大　荒島　真一郎

乳幼児期の子どもを持つ親への配慮（表象の言語化の発達機序）

札幌児童福祉センター　石川　丹

周産期における親への配慮（楽しい親と子の生活を考える）

日本小児科医会　南部　春生

第６回子どもの心研修会　　東京　日本都市センター

前期：平成１６年５月２２，２３日　　後期：平成１６年７月２４，２５日

前期プログラム

乳幼児期から学童までの心の発達	お茶の水女子大	青木　紀久代
乳幼児の社会性の発達	第一福祉大	宮原　和子
豊かな心を発達させる乳幼児の子育て	青山学院大	庄司　順一
広汎性発達障害	横浜中部医療センター	原　仁
少年非行の実態	千葉大	羽間　京子
小児の心身症	筑波大	宮本　信也
乳幼児の問題行動	あいち小児医療センター	杉山　登志郎
子どもによく見られる精神症状の見方	都立梅ヶ丘	市川　宏伸

後期プログラム

メディアと子ども	ＮＨＫ放送文化研究所	清川　輝基
虐待への対応	大阪大	西澤　哲
摂食障害	神戸女学院	生野　照子
カウンセリングの実際	上智大	横山　恭子
教育現場での取り組み	鳥取県立赤碕高校	高塚　人志
ＡＤＨＤへの対応	北海道大	田中　康雄
不登校児への対応	立命館大	高垣　忠一郎
ＰＴＳＤへの対応	武庫川女子大	倉石　哲也

第７回　子どもの心研修会　　福岡市　アクロス福岡

前期　　５月１４日（土）、５月１５日（日）

『心の発達の基本を知る』

乳幼児期から始まる心の発達　服部　祥子（大阪大学人間科学大学教授）

豊かな心を発達させる子育てに大切なこと

横山　正幸（福岡教育大学教授）

子どもの睡眠と心の発達　　神山　潤（東京北社会保険病院）

脳科学からみた子どもの心　　竹下　研三（第一福祉大学教授）

『生活リズムから見た子どもの心の問題』

メディアと子どもの発達　　山田　真理子（九州大谷短期大学教授）

遊びの大切さ　　増山　均（早稲田大学教授）

食育と心　　林　辰代（中村大学助教授）

ことばと心（母親の立場から）　林　スマ（ＴＶフリーアナウンサー）

後期　　７月１７日（日）、７月１８日（祭）

『発達期に見た心の発達と病理』

分娩周辺期　　山下春江（九州大学病院周産母子センター）

乳幼児期　　橋本武夫（聖マリア病院）

学童期　　藤林武史（福岡市子ども総合センター）

思春期　　森　崇（北九州津屋崎病院）

シンポジウム

『心の問題に対する小児科医の対応のありかた』

虐待－その予防　　藤川貞敏（福岡大学講師）

気になる子（境界児）－広汎性発達障害児を含めて－

納富恵子（福岡教育大学助教授）

臨床小児科医による心の相談の実際　井上登生（日本小児科医会）

乳幼児健診における心の問題とのかかわりかた

松本寿通（日本小児科医会）

午後に２時間の総合討論

第１回思春期の臨床講習会
平成１３年１１月４日　日本教育会館一ツ橋ホール
プログラム
１．思春期の性の悩みとその対応
日本家族計画協会　北村　邦夫　先生
２．若者の性の活発化と増加するＳＴＤ・妊娠
堀口　雅子　先生
３．学校への不適応
国立精神神経センター国府台病院　斉藤　万比古　先生
４．社会への不適応
千葉大学教育学部　羽間　京子　先生
５．校医はどうあるべきか　日本医師会　山田　統正　先生

第２回思春期の臨床講習会
平成１４年１１月１７日　大手町サンケイホール
プログラム
１．思春期問題への取り組み
厚生労働省　谷口　隆　先生
２．健やか親子２１と思春期のリプロダクティブ・ヘルス
日本家族計画協会　北村　邦夫　先生
３．学校への不適応
都立梅ヶ丘病院　市川　宏伸　先生
４．社会への不適応
成城墨岡クリニック　墨岡　孝　先生

第３回思春期の臨床講習会
平成１５年１１月２４日　日本都市センター
１．総論：思春期の心の問題
慈恵医科大学　牛島　定信　先生
２．面接のこつ（想像力と吟味力）
クリニック川畑　川畑　友二　先生
３．十代の受診から―性教育への提言―
河野産婦人科　河野　美代子　先生
４．ひきこもりの病理とその対応
爽風会佐々木病院　斉藤　環　先生

第４回思春期の臨床講習会
平成１６年１１月２３日　　日本都市センター

１．思春期の発達	都立梅ヶ丘病院	市川　宏伸
２．弁護士からみた非行少年	平和台法律事務所	大谷　辰雄
３．性教育に今求められるもの―十代の受診者から―	河野産婦人科	河野　美代子
４．五感を喪失した子ども達	五感生活研究所	山下　由美

第５回思春期の臨床講習会
平成１７年１１月２３日　　日本都市センター　で開催予定

子どもの心の問題に関する領域と対象疾患：

本会で対象としている子どもの心の問題は、子どもの心の発達から、小児科医が遭遇するであろう子どもの心の疾患に関するまで、幅広く研修することを目的に「子どもの心研修会」を前期・後期合わせて４日間にわたって開催している。

前期は、子どもの心に関する基礎編。後期は、臨床編となっている。

平成１３年からは、思春期の心の問題に焦点を当て、思春期の臨床講習会も年１回開催している。

「子どもの心研修会」および「思春期の臨床講習会」のプログラムは、別添を参照願います。

さらに、「子どもとメディア」の問題に関しても、平成１６年２月に公表し、市民への呼びかけとともに、小児科医会としての今後の取り組みについても触れている。メディアの及ぼす影響は、かなり大きいのに、どうしても市場原理が先に立ってしまうことが問題である。

認定制度：

小児科医としての経験も考慮して、日本小児科学会の認定医および専門医で、本会の会員であれば研修会に参加できる。

「子どもの心研修会」の４日間を履修した小児科医で、「子どもの心相談医」の登録申請をしたものを認定している。

５年ごとの更新手続きには、「子どもの心研修会」の後期再受講が必須である。その他に、子どもの心に関する講習会ないし講演会を受講して（１時間２単位）、合計３０単位の履修を義務づけている。

子どもの心の問題に携わる医師の養成について：(保科の個人的意見)

社会問題となっている「子どもの心の問題」は、幼少期における心の発達に問題があることが多い。この時期は、初期の段階で小児科医を受診していることが多いのであるが、診療に追われる小児科医としては見過ごしてしまいがちである。

少しでも、その時に、カウンセリングとまでは行かなくても、コンサルトないしアドバイスができれば、その子が変わっていくことを経験されている小児科医も多いはずである。

生まれつきの素因による子どもの心に関係する疾患の場合でも、早期に両親による認識ができれば、疾患の進行を留めて比較的普通の社会生活ができるようになる可能性が高い。

児童精神科医や専門医が、ここまでは第一線の小児科医が対応して欲しいというレベルまで、子どもの心相談医をレベルアップさせる方法も今後は考えなければならない。

児童精神科医や専門医とどこが違うのか、明確な線はない。積極的に心の問題を起こし始めている子どもを診て、体験を重ねているかどうかの違いが一番大きいと思われる。

第一線の小児科医が子どもの心の相談医となって、地域に貢献しようとしても、患者様の最終的な受け入れ機関は乏しいのが現状である。

児童精神科医や心理士、さらに児童相談所などの行政機関と連携できる仕組みも必要となる。このような仕組みは、厚生労働省主導で各自治体にそういう組織作りを推進させると行政との連携もしやすくなる。その組織には、少なくとも現場で活躍している子どもの心相談医を参加させるべきである。

幼児期から早急な対応をしないと、１０～１５年後に現れる結果がますます悪化していることになる。

子どもの心の問題に少しでも関心を持っている第一線の小児科医を活用すべきである。

《専門とする医師の養成について》

児童精神科を専門とする医師の養成は、やはり時間がかかってしまう。

しかし、養成すべきである。

小児科を志望する医師の少ない現状で、児童心理や児童精神科を目指そうとする小児科医はさらに少ない。精神科から目指してもらえれば、もっと助かる。

それでも、養成された小児科医が児童精神科的な専門性を持って子どもの心に対応していけば、精神・運動発達の両面を統合しながら子どもの成長を援助することができるであろう。

どのように養成していくかは、今後の検討に期待する。